

vol.18

選書者：山本一美

(神戸市立三宮図書館 館長)

●『そして誰もいなくなった』

著者：アガサ・クリスティー

洋書の翻訳本は言い回しが難しいものが多くなかなか海外作家の本は手にしなかつたが、ミステリー界では有名なこの本だけはずっと気になっていて、大学生の頃に初めて読んだ海外作品。物語の舞台や童謡になぞらえた見立ての手法は有名で、影響を受けた作家・作品も多く出ている。それに加えて犯人が仕掛けた心理戦が秀逸で、自分の中では今でも一番の本です。

●『七回死んだ男』

著者：西澤保彦

学生の頃から読む本と言えばミステリー中心で、その中でもちょっとテイストの違ったものを探しているときにこの本に出会った。資産家の祖父の後継者を決める新年会で事件が…とあらすじだけなら王道だけれど、そこに主人公の特異体質が加わり“SF ミステリー”となっているのがとても面白い。読んで30年も経つのにまだ覚えています。

●『「おかえり」と言える、その日まで』

著者：中村富士美

この本は山岳遭難者6人とその家族たちに焦点を当てたもので、リアルな話となっている。著者は民間の山岳遭難捜索チームの代表を務める方で、警察が捜索を打ち切った後に家族から依頼を受けて捜索に当たることもあるってか、遭難者の性格や登山スタイル、登山の理由など細かなプロファイルからアプローチをしている。遭難事故のニュースはよく目にするが、この本を読んでからは、その人ひとりひとりの人生や待っているだろう人に思いを馳せるようになりました。

### ●『やさしいライン』

著者：やなせたかし

やなせたかしさんと言えば『アンパンマン』が有名だが、最初は漫画家として活動しており、『やさしいライオン』は絵本作家としてのデビュー作。やなせたかしさんご本人も、「『やさしいライオン』がなければアンパンマンも絵本化されなかつたと思う。」と言われている原点ともいえる本。犬のムクムクに愛情をもって育てられたみなしごライオンのブルブルはやさしいライオンに成長するが、ある日別れがやってくる…。読む人によって、悲しい、切ない、と感じるかもしれないが、私はやさしい話だなと思いました。

### ●『もうぬげない』

著者：ヨシタケシンスケ

インターネットの記事でこの絵本を知ったのがきっかけで、ヨシタケシンスケさんの作品に興味を持つようになった最初の一冊。上着が脱げなくなつた男の子が、なんとか脱ごうと悪戦苦闘するものの、序盤であっさりあきらめてしまう。ただ、あきらめ方が「ぬげなくたつていいじゃない」と前向きなのが読んでいて楽しくなる。あきらめずに頑張らなければならないばかりでちょっと疲れた時、今でもたまに手に取って読んでは癒されています。